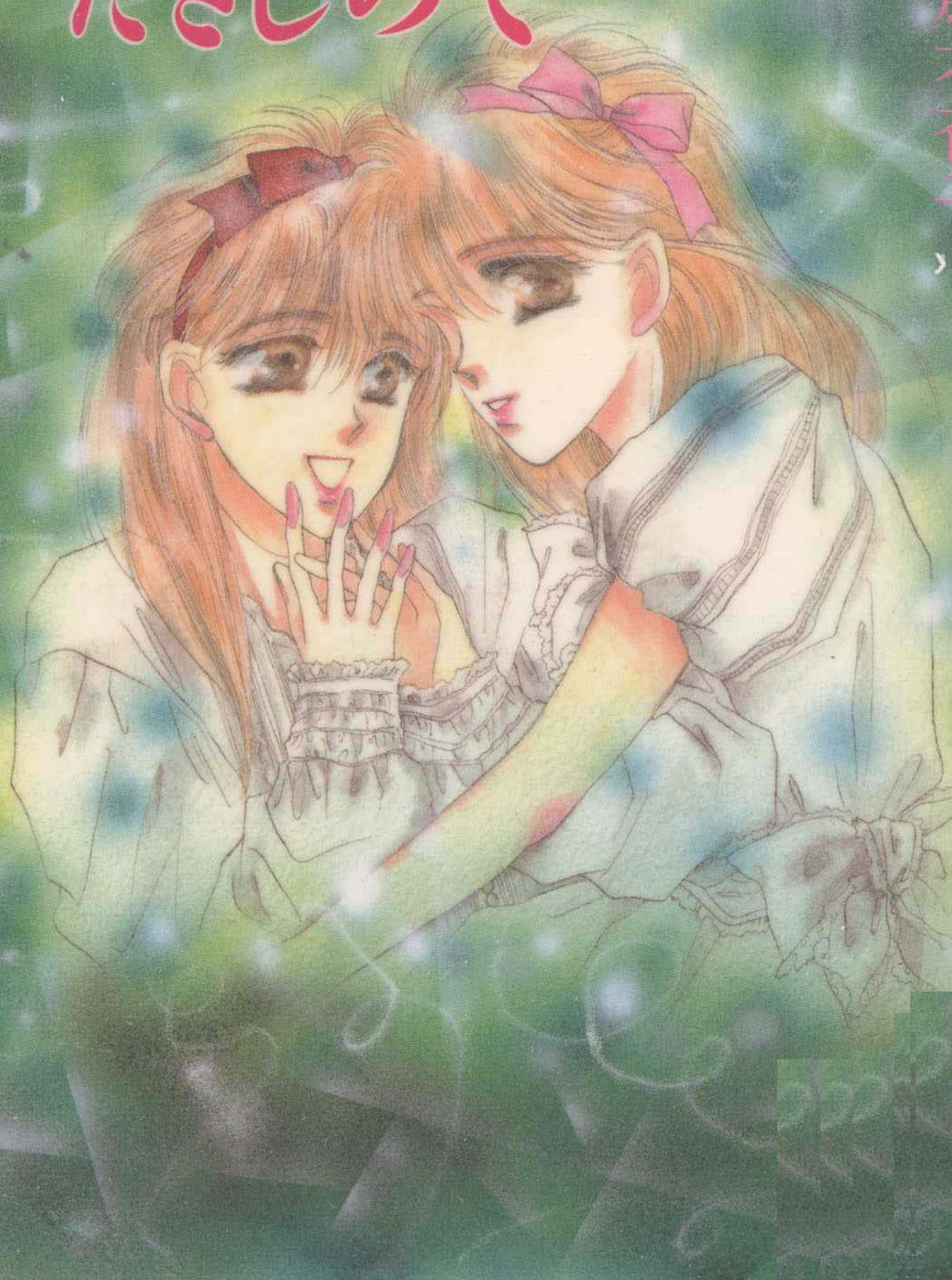


COBALT-SERIES

時の彼方で だきしめて

一藤木杏子



いっとうぎ・ようこ

本名・渡辺かおり。1962年2月17日、横浜生まれ。水瓶座。AB型。
'83年第1回コバルト・ノベル大賞に『たとえば、十九の時のアルバム
に』が佳作入選。趣味はニューミュージック、旅行、アニメ、英会話。
著書に『くどき上手なピーターパン』『ラスト・シーンでほほえんで』
『ファースト・シーンはろまんていっく』『恋のむこうにオフロード』
『恋のルートをかけぬけて』『風色ロマンスごいっしょに』『エンドマー
クは乙女ちっく』『えびろーぐはファーストKISS』『½・フシギの七
日間』がある。



時の^{かなた}彼方でだきしめて

COBALT-SERIES

1990年12月10日 第1刷発行

★定価はカバーに表
示してあります

著 者 一 藤 木 杏 子

発行者 若 菜 正

発行所 株式会社 集 英 社

〒101-50

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

(230) 6 2 6 8 (編集)

電話 東京 (230) 6 3 9 3 (販売)

(230) 6 0 8 0 (製作)

印刷所 凸版印刷株式会社

© YÔKO ITTÔGI 1990

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められ
た場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本はご面倒でも小社製作課宛にお送りください。送料は小
社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611489-5 C0193



COBALT-SERIES

時の彼方でだきしめて
一藤本杏子

集英社



時の彼方で
だきしめて

ゆらりと空気が揺らぎ、
自らが作り出した異空間の中、
その姿を現す火村紫乃。
彼はあたしたちを見ると、
目を細めた。



「これは驚いた……。」

神代^{かみしろ}の姫がふたりいるとは

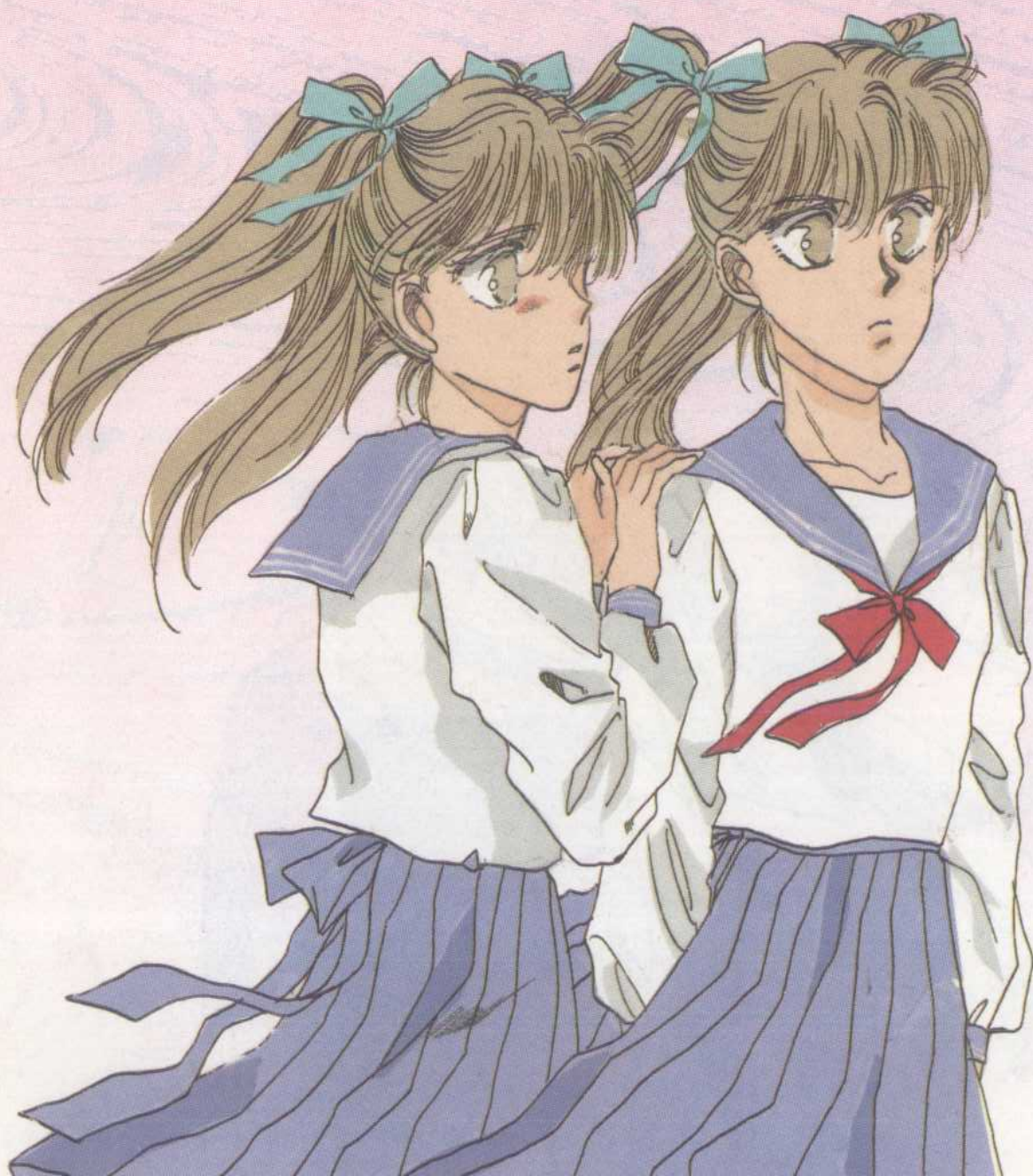
好奇心をたたえ、ルカとあたしに

からかうような視線を投げてくる。

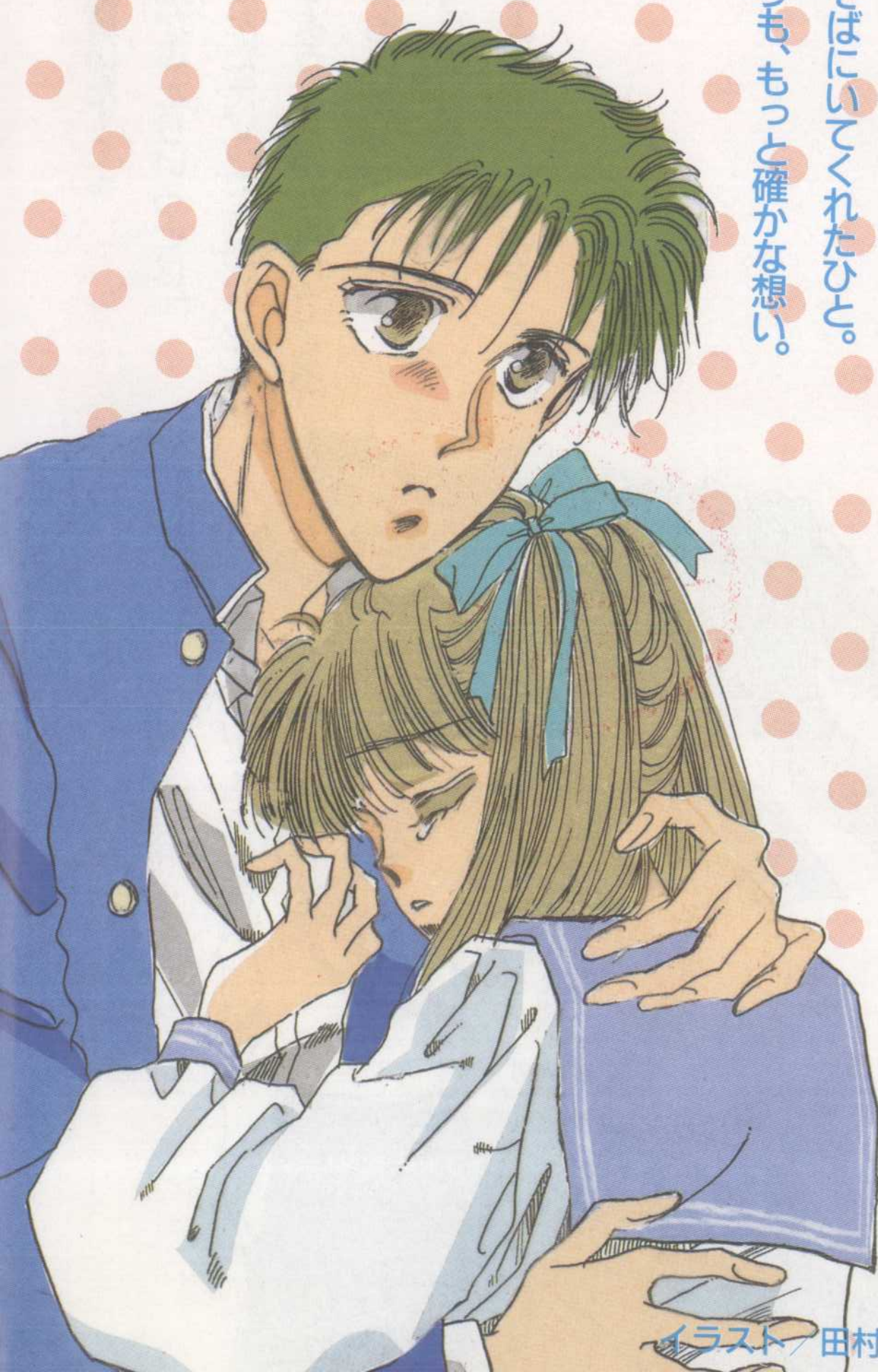
「ふたりもいるなら、

ひとりくらいは私を愛して

くれてもよさそうなものを……」



「やっとはつきりわかったの。
誰よりも——しんご慎吾くんが好き」
ずっとそばにいってくれたひと。
憧れよりも、もっと確かな想い。



目次

時の彼方^{かなた}でだきしめて

I	前 兆	12
II	遺言で、婚約を!?	42
III	想 い	71
IV	迷 図	95
V	異 変	139
VI	スーパ―ガール、再び!	159
VII	時の彼方 ^{かなた} でだきしめて	183
	あとがき——おしゃべり通信Ⅲ	214

登場人物紹介

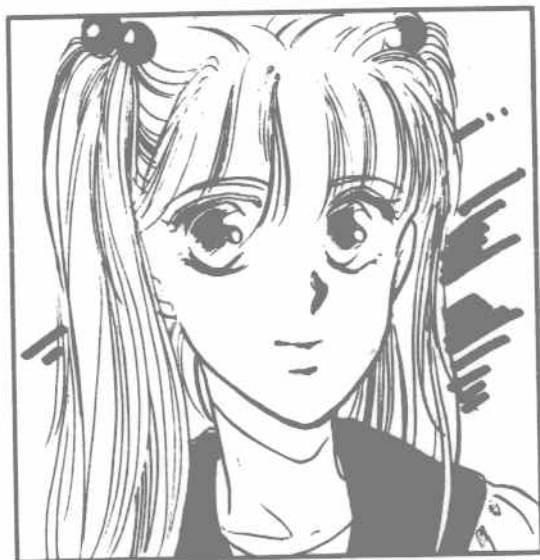
代々巫女^{みこ}を出してきた家系に生まれ、微弱ながらも不思議な力を持つ高この少女。昔はコンプレックスが強かったが、「ルカ」の出現によって、少しずつ変わりはじめている。

かみしろるか
神代流花



「もっと自由に生きたい」という願いが生んだ、流花の分身^{リベンジ}。外見は同じだが、性格は正反對の奔放なスーパースクール。ただ、その存在は流花の体力にかなりの負担をかけている。

ルカ



流花の「ふたいとこ」でかつ幼なじみのクラスメイト。のっぽで武芸全般なんでもござれの男の子。恋愛ごとには疎い朴念仁だが、突然流花との婚約騒動がふってわいて……。

ちゅうぜんじしんご

中禅寺慎悟





あま せ ひで ゆ き

天瀬秀幸

流花がひそかに憧れている三年生の先輩。日本舞踊の家元の息子で、文武両道にたけ、華道部と弓道部をかけもちしている。彼に誘われて、流花も弓道部に入った。



ひ む ら し の

火村紫乃

流花のクラスに転校してきた美少年。この世のものではないような美貌と、神秘的な雰囲気を持つ。彼の出現は、流花が不吉なイメージを感じてた時期と一致していて……。

イラスト／田村みゆき

時の彼^{かなた}方でだきしめて

I 前 兆

窓の外は、ものすごい嵐だった。

雨と風、そして雷^{かみなり}。夜の闇を走る閃光^{せんこう}と、すさまじい雷鳴^{らいめい}。

この地方を直撃した嵐の夜。ゴマファザラシのぬいぐるみ・ゴマちゃんと一緒に避難^{ひなん}してきた、百合花^{ゆりか}おねえちゃんの部屋。

「きゃあっ！」

雷鳴がとどろくごとに悲鳴をあげるあたしに、おねえちゃんのあきれた声がとぶ。

「ちょっと、流花^{るか}ってば、そんなに大騒ぎしなくても大丈夫よ」

「だって」

あたしはゴマちゃんをだきしめながら、へーぜんとしているおねえちゃんを感心して見つめた。

「おねえちゃんこそ、よく平気でいられるわね」

眺^{なが}めていたピアノ曲の楽譜から顔をあげ（まだ停電はしていない）、おねえちゃん、あっさ

り言っつてのける。

「心配しなくてもいいわよ。うち、避雷針ひらいしんついてるじゃない」

「避雷針だけの問題じゃないような気もするけど……きゃあっ！」
しゃべってるそばから、またすぐ近くで雷鳴。

「近いわね」

さすがに冷静なおねえちゃんも、いくぶん心配げに窓の外に視線をむけた時だ。
夜空がかと光り、続いて落雷のものすごい音がした。

「今の、近くに落ちたわよ！」

ふたりで窓ぎわに走りより、カーテンを開けて外を見る。

「お城あとの公園あたりみたい……」

カーテンを手でどけたまま、そう、つぶやいた時。

不意に、何か——不吉なイメージがあたしの頭の中に流れこんできた。
闇を切り裂いて落ちる雷。崩壊する神石。

——封印ふういんが……解ける！

襲ってくる強烈な危機感に、思わず両手で頭をかかえこむ。

深い深い闇。解き放たれ、一瞬かかと輝く、邪悪なエネルギー。そして——また闇。
それは時間にしたら、ほんの数秒のことだったと思う。

「流花？」

おねえちゃんがいぶかしげに呼ぶ声に、あたしは、はっと現実にかえった。

「どうかしたの、黙りこんで」

白昼夢はくちゆうむからさめたように、あたりを見渡す。いつもと変わらない、おねえちゃんの部屋。

もう、すっかりひいた幻影。

二、三度、頭をふり、額ひたいにうかんだ汗あせをぬぐう。それから、心配げに顔をのぞきこむおねえちゃんに笑いかける。

「——ううん、なんでもない」

「なんでもないって顔じゃないわね」

「そ、そんなことないけど……」

「そういえば、流花は昔から雷が苦手だったものね」

おねえちゃんは少し考えこみ、それから微笑してみせた。

「いいわよ。今夜はそのゴマちゃんごと、ここに泊まっていきなさいな」

「わ、ホントにいいの？」

もちろんよ、とおねえちゃん、優しく笑う。

「ありがとっ♡ じゃ、あたし、自分の部屋から枕とパジャマとってくるね」

「ええ、そうなさい」

